

令和 6 年度舞鶴市総合教育会議 会議録

〈開催日時〉 令和 6 年 10 月 31 日(木) 15:30～16:50

〈開催場所〉 舞鶴市政記念館(赤れんが 2 号棟)ホール

〈出席者〉 市長 鴨田 秋津
 教育長 廣瀬 直樹
 教育委員 内藤 行雄
 教育委員 小川 喜生
 教育委員 四方 あかね
 教育委員 稗田 洋子
 教育委員 西谷 和子

〈傍聴人〉 14 名

〈次第〉 1. 市長挨拶
 2. 報告事項 第 3 次教育振興大綱事業計画書実績報告について
 3. 協議事項 子どもにとっての望ましい教育環境について
 4. その他

〈会 議 録〉

1. 市長あいさつ

皆様、こんにちは。本日は、ご多用の中、舞鶴市総合教育会議に参加いただき、誠にありがとうございます。日頃から委員の皆さんには、市の教育行政に格別のお力添えを賜り、この場をお借りして感謝申し上げます。

各小・中学校では、体育祭や運動会、文化祭などのイベントを終え、早いもので 2 学期半ばを迎えております。

そのような中、本市におけるトピックスとして挙げられる 1 つ目が、この 2 学期から中学校の学校給食の無償化を実施し始めたことです。無償化を実施する前、1 学期の後半に教育委員会主催のもと各学校に訪問し、私自身も全 7 中学校を回りお話ししてまいりました。生徒と直接話す時間は限られていましたが、彼らがどんな考えを持っているかを知ることができ、また私たちがどのように給食を考えているか、どのような考えで給食無償化を推進しているかを説明することができました。非常に意義があったと思っています。

また、生徒たちは臆せずに、給食についての要望を伝えてくれました。例えば「味付けが薄い」「給食の日にふりかけが欲しい」「パンの量を増やしてほしい」といった声が上がりました。これらの直接聞いた意見を大切にし、可能な限り反映していきたいと思ったところです。

2 つ目のトピックスは、中学校の部活動の地域移行についてです。これは単に子供たちの活動の場を学校から地域へ移行するだけでなく、人口減少社会でも子供たちが充実した練習環境を維持し、その中で自分の体力を鍛えたり、試合で勝利を追求したり、さまざまなニーズに対応することも目標としているところです。令和 3 年度より始まったこの取組は、運動部活動だけでなく文化部活動も同様であり、私たちはこれを加速させていきたいと考えています。

この取組は当初、国からの意向でしたが、国の方向性があるから進めるものではなく、舞鶴市の現状を考慮しながら、どう進めていくべきかを判断していくことが本質的な話であると考えています。

この部活動の地域移行については、学校現場の皆さんの理解と協力をいただく中で進んでいくものであり、舞鶴市にとってどうするのがよいかしっかりと議論していきたいと考えています。

さて、本日の議題は「子どもにとっての望ましい学校教育の環境とは」についてです。この件については、今年の 8 月 18 日に市民の皆様との対話集会を実施し、委員の皆様にも傍聴していただきました。

人口減少は進行しており、現在の生徒児童数は 5,646 人で、今の概算ですと、6 年後の 2030 年には約 4,700 人、約 1,000 人の減少が見込まれています。さらに、20 年後の 2045 年には約 3,000 人へと減少し、今の児童生徒数の約半分になると予測されています。

もちろん、様々な政策を打ち出してはいくのですが、人口動態を考えると、これらの数値が現実となることが考えられます。その中で最も重要とされるのは、「子どもたちにとってベストな教育環境をどう作るか」です。地域の皆様のご理解やご協力をいただく中で、学校規模の適正化についても検討を進めていく必要があると考えています。その点において、本日は、委員の皆様との議論を深めたいと思っています。

本会議は、教育の課題や目指す方向性を共有しながら、教育行政の推進を図っていくための重要な会議です。これからの議論で、皆様にはぜひ、それぞれのお立場から忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

2. 報告事項

第3次舞鶴市教育振興大綱事業計画書について
—事務局から報告—

3. 協議事項

子どもにとっての望ましい教育環境について
—事務局から説明—

(鴨田市長)

事務局からの説明もさきほどありましたし、冒頭で私も触れましたが、近い将来、児童や生徒数が減少する中で、より良い教育環境とはどのようなものか、私たちは子どもを中心に考える必要があると考えております。

その際に、学校規模や地域との関わり、施設整備等の観点も含め、今後の人口減少社会の中で、子どもたちにとって望ましい教育環境についての意見や、配慮すべき点など、委員の皆さまの考えをお聞きしたいと思います。

まずは、皆さまお一人ずつご発言いただき、その後、いただいたご意見等を掘り下げて議論できたらと考えています。それでは初めに廣瀬教育長、お願いいたします。

(廣瀬教育長)

市長の冒頭の挨拶にもありましたとおり、本市には取り組むべき教育課題が山積しています。そして、今日のテーマもその課題の一つであり、確実に進めていかなければならないと考えております。

私自身、個人的な話になりますが、私は小学校5年生の1学期までは、児童数が1,200人を超える小学校に在籍し、その後、家庭の事情で児童数が30人以下の小学校に転校したため、大規模校と小規模校のメリットとデメリットを経験してきました。

しかし、それは大昔の話であり、今私たちが考えるべきは、これから子どもたちはどのような時代を生きていくのか、そして、その子どもたちにとって大切な教育環境はどのようなものかということ、自分の所管として申し上げたいと思います。

冒頭で示されたように、児童数の減少は本市に限らず、全国の地方都市が抱える大きな問題です。本市においても、現実の問題として真剣に向き合っていかなければならないと思いますし、この現実をしっかりと踏まえて、子どもを中心に考え、子どもたちにとって望ましい教育環境は何かを検討していくべきだと考えます。その際、もちろん、地域のご意見をいただきながら検討することは言うまでもありません。

望ましい教育環境、特に学校規模を考える上で大切なこととしてこれからの子どもはどんな社会を生きていくかということ、皆さんと改めて確認しておきますと、技術革新が進み、高度情報化社会やグローバル化社会の中で子どもたちは生きていきます。そういう社会の中で、幸せに生きていく力を身につけなければいけません。

すでに、1人1台のタブレット端末の環境整備がなされ、学習で積極的に活用されているところです。これから益々人工知能やロボット技術が社会や生活を大きく変えていきます。人々の繋がりは経済や文化など社会のいろんな分野で国境を越え、地域を越えて活発になって緊密になっていくと予想されます。

それらを踏まえ、今、学校で将来を見据えて行っている学習のキーワードは「主体的・対話的で深い学び」です。これは単なる知識や技能の習得、ものをどれだけ知っているか、あるいは暗記できているかというものだけでなく、将来 AI やロボットに取って代わられない力、言い換えると、コミュニケーション力や人間関係を築く力、友だちの様々な意見に触れて意見を交わし合い、協力して問題を解決する力、新しいものを創造する力といったものをみんなで協力して養う、そのようなことを、今、教科や総合的な学習の時間を使って学び、育てています。

この学習を進める上で、一人や数人だけの学習ではなく、ある程度の人数の集団において初めて効果的に学習することができると私は考えています。

このような学習環境を考慮すると、学校規模の適正化を図ることは、子どもたちにとって非常に大切なことだと考えています。以上です。

(鴨田市長)

ありがとうございます。次に、内藤委員お願いします。

(内藤委員)

まず初めに、先ほどの報告で触れられた第3次舞鶴市教育振興大綱に基づき、様々な事業が計画され、取組が進められていること、全小中学校では、育てたい子ども像「ふるさと舞鶴を愛し 夢に向かって将来を切り拓く子ども」を目指して努力されていることを嬉しく思っています。

その中で、児童生徒数が減少し、それにどのように対応すべきかが課題となっています。今日の資料にもあったように、10年後の小学生の数は3,705人から2,627人へ、中学生は1,941人から1,536人へ、つまり、それぞれ中学校では約500人、小学校では約1,000人の減少が見込まれています。

私自身、団塊の世代として過ごした時代を振り返ると、自宅周辺だけでも同年代の子どもが10人ほどいました。ところが、現在の孫の世代になると、学校から帰っても近所に遊ぶ友達はいない状況です。私の子どもたちには、どこへ行っても人がいて、友人や様々な人との交流の中で体験したことが、確実に現在の私の人生の中の大きな糧となっていることを感じています。

従って、私が感じている以上に危機的な状況が10年後に訪れるのではないかと予想しており、先ほど教育長もおっしゃいましたとおり、当然学校の規模の再編等を進めていかなければならないと思っています。待っているだけではなく、すぐに再編計画等を皆さんと一緒に考え、取り組んでいくべきだと思います。学校の再編は、単に数を合わせれば良いという問題ではないことを皆さんご存じのことだと思います。それぞれの学校には、その歴史と「地域のためにある学校」というような思いもあり、地域の皆さんの意見を十分に考慮しながら進めていく必要があります。

そのような難しい問題ですが、まず、児童生徒数が極端に少なくなるという問題を何とか解決できないかと思っています。ただ、地域から学校をなくさないでほしいと年配の方は言うかもしれませんが、最近の親御さんたちは「子どもにとって一番良い方法は何か」を重視すると言われると思います。それを踏まえて、学校の再編を早急に進めていかなければならないと考えています。

先ほども申しましたが、学校再編は単なる人数合わせでなく、子どもたちの将来にとって一番いい方法はどのようなものかを考えていくことが、今後の課題だと思っています。今日は皆さんの意見を聞かせていただきながら、私自身も考えていきたいと思っています。以上です。

(鴨田市長)

ありがとうございます。次に、四方委員お願いします。

(四方委員)

私は舞鶴こども療育センターで20年以上働いています。京都府立ですので、舞鶴市以外にも、京丹後市まで出かけておりますが、一部地域では過疎化がさらに進行し、学校の生徒数が少ないということはもっと顕著であり、私が相談を受けた子どもの中には、全校生徒が2人の学校の子どもの方もいました。

そのような学校の子どもたちから話を聞いていると、生徒数が少なく、学校の規模が著しく小さいことが、子どもの精神面や発達に影響を及ぼしているという現状を感じています。全校

生徒数が2人の学校に通う子どもは、学校に行くのが辛くなり相談に来られたのですが、その理由として、1対1または1対2の状態で常に先生の視線がいつも自分に向いているため、常に緊張し、疲れてしまうというものでした。

人数が少ないために思考の広がりをもたせにくいということもあるでしょう。また、クラスが大人数だと、自分の失敗があまり目立たないと思うのですが、例えば5人だけのクラスで失敗したら、それは大きく目立つということで、失敗に対してすごく臆病になったり、逆に良いことをすると目立つから恥ずかしくなったりすることもあります。人数が多いから恥ずかしいということもあると思いますし、人数が少ないことではみ出たくないという気持ちが大きくなる場合もありますし、これには一長一短があると思います。

私自身は京都市出身で、大規模な学校で学んできました。小学校はそこまで大きくはありませんでしたが、中学校は11クラスあり、私の後の学年では最大で15クラスまであるようなかなり大きな学校です。

私が舞鶴市に移り住んできた際に驚いたのは、各学校のクラブの数の少なさでした。私の認識では、さまざまなクラブがあるものと思っていました。しかし、現状ではサッカークラブを作ると野球部が作れず、野球部を作ったらサッカー部を作れないということで、どちらかしか選べない、あるいはどちらもない場合もありました。ある地域では、バスケットボール部しかない学校があり、生徒は5人で何とか成り立っており、文化部はありませんでした。したがって、中学校へ入ると全員が必ずバスケットボールをする必要があり、運動が苦手な子どもからは「中学校生活は地獄のようでした」という声もあり、選択肢が非常に少ないことは困ると思います。

また、お話がありましたが、過疎化により友達と遊びたい場合でも、近くに遊ぶ友達がおらず、遊びに行くには車の移動が必須であるため、結果として子どもたちはゲームを中心に過ごすようになることも問題と感じます。

教育は単に学力を身につけるだけでなく、集団の中で自分とはどういう人間で、社会の中で何ができるのかを体感しながら学んでいくところだと思います。文部科学省の資料を見ますと、「メタ認知」の重要性が掲載されていました。集団の中でこそ、自分自身を客観的に見ることが可能だと思いますが、それにはある程度の規模が必要で、その保証が難しいと感じています。これを解消するためには、学校同士が繋がり、年に数回、大きな集団での活動の場を作ることが必要なのではないかと思います。

最後に、大学や専門学校がないという点も、小中学生にとっての望ましい教育環境という意味では、物足りなく感じてしまうことがあります。自分自身を振り返ると、小学生の頃、大学生が主催するキャンプやイベントに参加し、その姿に憧れを抱き、「あんな大人になりたい、あんな大人になるに決まっている」とまで思っていました。そのような憧れを抱くこともすごく大切だと思います。例えば、「将来の夢や目標を持っている児童・生徒の割合」について、小学生の時は82.9%と比較的高い数字ですが、中学生になると62.6%へと大きく下がっています。この3年間で一体何が起ころのかと思いました。

このような良い環境を用意するのも大人の技量であると思います。結局のところ、子どもたちの話ではありますが、実質的に大人の問題だと思います。例えば、市でさまざまな取り組みが行われていても、情報を収集できない保護者もいれば、情報を集めても経済的な理由や、移動手段の問題で参加できない家庭もあります。結局は、大人の問題だと思いました。以上です。

(鴨田市長)

ありがとうございます。次に、小川委員お願いします。

(小川委員)

私は学校歯科医として、10年以上、中舞鶴小学校にて、歯科健診や翌年度から小学生になる子どもたちの就学時健診に訪れています。毎年子どもたちの数が減少していることをはっきりと感じています。

毎年、就学時健診の際には、新しく入学する1年生が1クラスか2クラスになるかということを思っているのですが、ここ数年間では、児童数はかなり減っており、1年生から6年生まで全て一クラスとなっています。昭和時代と違い、人数が少ない現状に寂しさを感じています。

資料を見ても、今後複式学級を実施する小学校の数が増えていくことがわかります。子どもたちがクラス替えをしていろいろな友達と触れ合う中で、人間形成をするとされていることを考えると、学校の統廃合や一元化を進めることが必要なのかもしれません。通学手段の問題等さまざまな課題が出てくるとは思いますが、極端な例を挙げれば、舞鶴市の小学校を3校程度にまとめるというようなビジョンも必要になるかもしれないかという感想を持ちました。

学校では、児童会や生徒会などの活動で様々な役を交代しながら経験でき、人間的に成長することができますが、子どもたちが小中一貫9年間を同じクラスで過ごすということは、人間関係が固定化してしまうという問題があると感じます。昭和時代のように子どもたちがたくさんいて、多くの友達と触れ合うことで新しい人間関係や価値観に触れる機会はとても大切な経験だと思いますので、これらの観点からもこの児童生徒数の減少を深く見て考えていく必要があるのかなと思いました。

また、現在、教育環境は大きく変わっていると感じます。ゲストティーチャーとして中舞鶴小学校に参加した際には、全ての児童がICTを活用しiPadを使って授業を受ける新しい形への変化を目の当たりにしました。さらに、コロナ禍の影響によりオンラインでの遠隔授業も可能になり、教育環境はどんどん変わってきている中で、舞鶴市の子どもたちにとって教育環境をより良くするためには、私たちは柔軟に考え、知恵を出し合って考えていかなければならないと感じました。

学校の統廃合などを考えると、交通の便や通学距離など様々な課題が出てくるため非常に難しい問題だと思いますが、学校規模の適正化により、最終的には、子どもたちが「この学校で楽しかった。良かった。」という良い思い出を持って卒業できるような学校環境となればと思います。以上です。

(鴨田市長)

ありがとうございます。次に、稗田委員お願いします。

(稗田委員)

今回、20年後の舞鶴市の児童生徒の推移に関する資料を拝見いたしましたが、その内容には大きな衝撃を受けました。少子高齢化の影響が非常に厳しいことや、舞鶴市も例外ではないということを重々わかっていたつもりではありましたが、具体的にどのように学校の状況が変化するのかということ、資料を通して見ることができ、子どもの数がここまで減少することに本当に衝撃を受けました。

特に、小学校においては複式学級が半数を超えるということや、全6学年が揃わない学校が多くあること、また中学校でも複式学級ができるということで、本当にこれが20年後の現実なのだろうかと思いました。

子どもたちが健やかに育つために必要な環境として、様々上げられると思いますが、ここで私は2点あげたいと思います。

1点目は、「多様な繋がりの中で子どもが育つ」という環境です。学校の先生と子どもといった縦の関係、それから友人との横の繋がり、さらには地域の様々な方々との斜めの繋がり。このような縦横斜めの多様な繋がりの中で、子どもたちはたくましさやコミュニケーション能力、打たれ強い心などが育まれてくると常々考えています。

2点目は、「自分でしっかり考え行動し、将来を切り拓く力を育てる」という環境です。昨今、SNSなどによって溢れるようにやってくる情報や、AIやChatGPTのような技術の進化が注目されています。SNSを通じた闇バイトなど、本当にちゃんと自分の中で思考を通して判断しているのかなと思えるような問題も多々起こっています。自分の行動とか思考までもが、こういったことで知らない間に決定されてしまう、自分で判断せず流されてしまうといったことはありがちではないかと思います。やはり、自分が様々なことを自分事として判断し行動を選択できる、そのような子どもたちに育ててほしいと考えます。

これらの二つの観点を持って学校の適正規模について考えたとき、8月の対話集会では、一部から小規模には小規模校ならではの一人ひとりに応じた温かで丁寧な教育が可能であり、非常にありがたく思っているというような声もありました。確かに、その良さはあると思います。ただ、45年ほどの前の話になりますが、私が教員として採用され初めて赴任した時を振り返ってみました。赴任先は、今はもう統合されてなくなっていますが、全校児童36名の小学校でした。文部科学省指定の僻地校での表現力を育てる研究をしておりました。地域や保護者、子どもたちも仲良く、大きな家族のような温かい学校でした。その点では、小規模校の良さが出ていたのかなと思います。しかし、一方で私たち教職員は、常に子どもたちの弱さに直面していました。

例えば、家族的なつながりであるために、言葉を交わさなくてもわかり合えてしまって、「いよ、私がこうしてあげるね」というように、子どもたちは自分の言葉でしっかりと思いを伝えなくてもわかり合えてしまう中で育っていくこと。指示されたことはまじめに取り組むけれど、自ら考えて積極的に取り組むことが苦手であること。また、多様な考えに触れ機会が少なく、あの子が言ったらそれが正しいんだなと思ってしまったり、一面的な捉えに終わってしまったりということで、その辺り、教師は、子どもたちが大きな集団に入っても生き生きとたくましく育つようにと、配慮しながら指導方法を工夫していたことを思い出します。

36名の学校でそのようだったのですから、極端な小規模校では、継続して積み上げてきた教科指導やクラブ活動、自治活動、それから入学式や卒業式のような儀式的な行事を通して子どもたちが学ぶ機会があるのですが、これまで当たり前に行ってきた教育がなかなか成り立ちにくくなるのではないかと思います。

学校の適正規模に関する議論は、簡単に答えが出せる問題ではなく、地域の方々、地域の実情、保護者の願い、行政や学校現場の意見など多くの視点から、子どもたちにとってどうあるべきなのか、何が望ましいかということを経験を掛けて考えていく必要があると思います。先のことを見通しながら、様々な場や機会を通して、市民全体でも共通の課題として考える場を作っていくことが必要と感じました。以上です。

(鴨田市長)

ありがとうございます。最後に、西谷委員お願いします。

(西谷委員)

私は、朝に子どもたちを見守る中で気づかされたことがあります。それは、コロナ禍を経て、人への関心が薄れた子どもたちが増えてきた印象を持ちます。例えば、登校時に、以前は下級生を気にしながら登校している班長が、先に一人で行ってしまいその結果、1年生が置いていかれている、離れたところでぼつぼつと登校して長い列や単独登校になっているような印象を持つこともあります。子どもたちが自分のコミュニティを教師や他の大人たちから学びつつ、自分たちで築き上げていく過程は大切だと思います。

また、先ほどのご意見にもございましたが、多くの同級生に囲まれて、その中で人の考え方や価値観に触れ、それを理解し、共有し、ときにはぶつかることもあるでしょうが、それは感情のコントロールを学ぶ機会であり、将来生きていく上で、日々の積み重ねが精神的な成長につながるのではないかと思います。

さらに、現在進行中の部活動の地域移行についても考えてみたいと思います。試合で勝たなくてスポーツをがんばる子、様々なスポーツを楽しみたい子、放課後を自由に過ごしたい子、勉強に力を入れたい子と、それぞれ立場が異なると思います。その選択肢が増えることと、さらに子どもたちの居場所が増え、これから関わる人との新たな信頼関係が築け、増えることを期待しています。

話は、登校の話題に戻しますが、早く来る子や遅く来る子をよく観察すると、自身の子供の登校を見送ることができない家庭が少なくないということです。保護者の中には、学校から「子どもが学校に来ていない」という電話がかかってくるのがとても恐ろしいと感じている方もいますし、親が出勤した後からの登校時間までの間だけ祖母に来てもらうご家庭もあります。「小1の壁」というものもありますが、それは小1に限ったことではなく、保護者が子どもより先に出勤してしまうと子どもが起きられないことから登校しない状況が続き、それが不登校につながる恐れもあります。例えば、豊中市のように、地域的には早朝学童が必要と感じられる場所も増えてくるかと思います。

様々な状況でマンパワーが必要となってきますが、必要とされる場所に必要な人が配置されるシステムが構築され、うまく機能することが大切だと思います。そして、人を育てるのは人という基本の考え方を持ち続けながら、今後とも子どもたちの健やかな成長を見守りたいと思っています。以上です。

（鴨田市長）

皆様、それぞれの立場から貴重なご意見をいただきありがとうございました。小規模校の良さという話もありましたが、全体的には大きな集団の中での教育が望ましいとのご意見が多かったように思います。特に皆様から出た意見で、主体性や多様性の育成、さらには客観的な自己理解、コミュニケーション能力や判断力を身につける上では、大きな集団で教育をしていくことが望ましいというご意見でした。

私自身、小学生と中学生の子どもを持つ親としての立場から学校現場と関わっているとき、例えば、私の子どもが通う小学校は大きな学校ですが、中学校に進むと小規模校出身の子どもたちと一緒に、各出身小学校によってコミュニティの差が出ることを目の当たりにしています。これはよく言われる「中1ギャップ」なのかもしれません。また、複式学級が行われている地域の保護者からは、「小規模校出身の子どもが中学校に進学した場合、児童数が多い小学校出身の子どもたちとうまくやっていけるのか」という心配の声も耳にしております。

私たちはこれらのことをも考慮に入れながら考えていかなければならないと思っていますし、先ほど「当たり前のことを当たり前にできなくなっているのではないか」という意見も出ていました。今日将来の人口規模をお示ししたときに、もちろん、人口を増やすという考え方もありますが、現状の人口減少は国全体として受け止めるべきと考えています。それに対して、抽象的な対策ではなく、子どもたちの未来を見据えて今からしっかりと取り組んでいかなければ、時間だけが過ぎて何も解決できないことになっていくのではないかと個人的には感じています。今日の議論で皆様からいただいたご意見を参考とさせていただきながら、地域と一体になって早急に方向性を考える必要があるかと感じております。

これまで5人の委員の皆様からご意見をいただきましたが、それについての質問やさらに掘り下げたいことがあればぜひお聞かせください。いかがでしょうか。

例えば、現状の小規模校を解消しようという議論だけでなく、より抜本的に市内の学校を三つか四つの拠点に配置するという考え方もあるのではないかとということもお話しいただきまし

た。いずれの場合でも、小規模校の統廃合を行うと、通学の問題が生じると考えられます。現在でも、バスやタクシーで通学する子どもたちや、徒歩で登下校する子どもたちがいます。例えば、自宅から 500m のところに学校がある場合でも、統廃合によって、学校までの距離が 2～3km、場合によっては 5km ほどまで増えることが出てくることも想定されます。この問題について、皆さんのご意見を伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

（西谷委員）

今のところ学校は校区によって決まっており、通学手段も徒歩、自転車、またはバス等と選択肢が限られています。しかし、将来的に、自分の職場の近くの小学校や中学校を選べるようになったら、親が子どもを送迎する場合、家でなかなか集中して話を聞くことができない状況でも、送迎の車内で子どもと会話を交わす機会ができるのではないかと思います。親子間で喧嘩したときに「今日は送らない」ということがあるかもしれませんが、送迎が可能になれば、子どもとの時間を作れるのではないかと思います。

（鴨田市長）

ありがとうございます。実際、一部の地域では「家から学校までが非常に遠い」「そもそもバス停までが遠い」といった通学手段の問題についてご意見をいただくことがあります。元々そこで生まれ育った方と、自ら移住して来られた方があるということもあり難しいのですが、そこでの通学手段をどうしようかと考えたとき、例えば「自分の子どもを送りつつ、近隣の子どもたちも同時に近くのバス停まで車で送ればどうか」などの話をすることもあります。この方法は、共働き家庭や家庭内での会話が困難な場合にも有効な一つの方法だと思います。一部の地域ではライドシェアを利用した送迎がすでに実施されているところもあります。ライドシェアを子どもの登下校で利用することは安全性の確保などの課題がありますが、一つの考え方ではあると思います。他にいかがでしょうか。

（内藤委員）

私が先程お話ししたとおり、「学校規模の適正化」は非常に大切なことだと考えています。市長も指摘されたとおり、中学校では部活動の地域移行ができるだけやりやすい規模の確保も考慮して進めていくことも考えられます。また、小学校については、児童数を見ると、そのうち学校として当たり前にやってきたことが成立しづらくなっていく学校は地域的に限られてくるため、このような現状を考慮し、自宅から通学できる範囲をどう確保するか、また、その地域の子ども数がゼロになるわけではないので、行政としてどのように通学手段を確保するかを、学校規模の適正化を検討する際に考慮すべきだと考えております。

（鴨田市長）

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

（小川委員）

委員の皆様からのご意見にもありましたとおり、小学校や中学校は地域と密接に関わっている部分が多いため、学校の統廃合等の問題に対しては地域の理解と協力が必要だと思います。

す。先ほど、子どもたちを多く集めるには、舞鶴市で三つほど学校を作りそこに子どもたちが通うような形しかないのかなと考えて例示いたしましたが、そうすると交通の便など様々な問題が出てくると思います。学校は安心安全な場所であるとの信頼があるからこそ子どもたちを学校に通わせるのであり、地域の方々の理解や地域の大人の見守りがとても重要だと感じています。

また、子どもの数が少ない学校を解消するためには、地域の方々と相談しながら、現在の校区を見直すことも一つの方法かと感じました。以上です。

（稗田委員）

先ほどから大きな改編が必要という話が出ていますが、やはり小学校および中学校は義務教育の場として、子どもたちが安心して通学できることが何より大切です。

登下校の問題では、「自分でなんとかしておいでよ」と言える中学校 3 年生と小学校 1 年生では状況は大きく異なり、大きな課題となってくると考えます。

また、現在推進しているコミュニティスクールや地域と一体となった学校を核とした地域作りの観点からも、学校がなくなるということは非常に大きな影響を及ぼします。地域には、学校に残ってほしいという強い思いがあり、例えば福知山市の例を挙げますと、昭和 53 年に廃校となった学校の地域の方々が「私たちの地域からは学校がなくなったから。」とおっしゃるほど思い入れは深いものです。そのため、学校の統廃合によって地域との繋がりが途切れてしまうと、小中一貫コミュニティスクールとしてこれまで舞鶴市が大切にしてきたものが失われてしまうようなことになるのも困ると思ったところです。様々な立場からの意見があり、そこをどう合意形成に結び付けるかを考えると、とても時間がかかると感じています。

（廣瀬教育長）

通学について考えると、先ほどのご意見にもありましたとおり、小学校 1 年生と中学校 3 年生では大きく異なります。通学距離や時間、それにバスに乗ったとしても移動時間が長くなることを考えると、小学校低学年の児童が毎日のように 10 キロ、20 キロもの道のりを登下校することが本当に良いのかという点を考慮しなければならないと思います。

さらに、学校が地域のコミュニティの場という形になっており、学校がなくなるとは地域にとっての核が一つなくなることであり、学校が統合された場合は、意識的に統合された地域を連携協働していく教育活動を進めたり、コミュニティスクールに積極的に関わっていただいたりする必要があると考えます。

（鴨田市長）

皆さま、ありがとうございます。非常に有意義な議論ができたと思っています。時間が迫っておりますが、他に何かございますでしょうか。

（四方委員）

学校が統合され、通学距離が長くなる場合はスクールバスの整備が必須だと思います。私自身、アメリカに住んでいたことがあり、スクールバスで通学するのは当たり前のことでした。ここで発想の転換と言いますか、過疎地では、「学校まで遠くなってしまう、スクールバスで通学し

なければならない」となると、少し残念な感じがしますが、その地域が元々広く人口密度が低いだけで、スクールバスで通学することが当たり前とすれば、何年か経てばそれに慣れ当たり前になるのではないかと思います。私は、アメリカの黄色いスクールバスがとてもかわいくて、それに乗ることがみんな１年生になったときの楽しみでしたので、物は考えようなのかと思いました。

また、登校はもちろんですが、学校が遠くなった場合、放課後の過ごし方が難しいと思っており、この点については、学童クラブのあり方を考えていく必要も出てくると思います。アメリカでは学童クラブが充実していました。一つの施設にまとめるのではなく、子どもたちが家に帰ってきたのと同じような形のものができたらいいと思います。今、舞鶴学園さんも峰山乳児院さんも、それぞれの棟が「家」と呼ばれています。それぞれに玄関があり、「おかえり」と言って迎えてくれる学童クラブがあれば我々の問題の解決につながるかなと思いました。

（鴨田市長）

皆様、ありがとうございました。これまでの協議の中で、発想の転換というお話がありました。また、これまでの当たり前が当たり前でなくなっているというお話もありました。その中で印象的であったのは、子どものことではあるが大人の問題であること、そこから逃げずにしっかりと向かい合っていくことが必要であると私自身強く感じました。

協議はこれで終わりとさせていただきたいと思います。本当に活発にご意見をいただきましてありがとうございました。

4 その他

5 閉 会